

東日本大震災記録写真集

～「あの日」から私たちが歩んできた1827日～



「誇りある福島」の実現を目指して

震災から5年の歳月が経過しました。

これまでの全国からの心温まる御支援と県民の皆さんのためまぬ御努力に心から感謝を申し上げます。

平成23年3月11日午後2時46分。

あの時から、私たちを取り巻く環境は一変し、今もなお多くの県民の皆さんが避難生活を続けています。

また、廃炉・汚染水対策や被災者の生活再建、風評と風化の2つの逆風など課題は山積しており、復興はまだ途上です。

一方、常磐自動車道の全線開通、ふたば未来学園高等学校の開校、ふくしまステイションキャンペーンによる観光地のにぎわいなど、明るい光は着実に広がりを見せて、県内各地に笑顔が戻ってきていると感じております。

ふるさと福島の復興を進め、将来世代に引き継いでいくためには、福島の「光」と「影」の両方を丁寧に発信しながら、新しい誇りを生み出していかなければなりません。

県民の皆さん、そして福島に心を寄せていただいている国内外の多くの方々と手を携え、「生まれて良かった、住んで良かった、来て良かった」と思える「誇りある福島」の実現を目指して、果敢に挑戦を続けてまいります。

季節が巡り、子供達がちゃんと成長しているように、私たち大人も、同じ場所で立ち止まらず、前を向いて歩いていくことができましたら、と望みます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」より（県内在住の女性）



表紙のふたり

可愛らしい笑顔でほほえむ松下直生くん(右)と塩谷梓ちゃん(左)が産声をあげたのは平成23年の春。未来を担う子どもたちの成長は、復興への道を歩む福島とともにあります。

インタビュー

私たちの、あの日、あの時、そして今	3	ふくしま復興への軌跡2011	8
それぞれの家族①	23	ふくしま復興への軌跡2012	24
ふくしまへ思いを込めて①	35	ふくしま復興への軌跡2013	36
それぞれの家族②	45	ふくしま復興への軌跡2014	46
ふくしまへ思いを込めて②	53	ふくしま復興への軌跡2015	54
それぞれの家族③	61	そして、ふくしまは未来へ	62
福島県復興計画	67		

*参考文献：民報年鑑（福島民報社発行）、みんゆうデータブック（福島民友新聞社発行）

福島県知事
内堀雅雄



新しい魅力を掘り起こしたい
地元の素材だからこそ

急いで避難したあの日
漁を終え小名浜から帰ってきて別
の仕事をしていたときに地震が起き
ました。建物や道路にヒビが入り、津
波の危険もあったので急いで車に乗
って高台へ避難しました。津波が押し
寄せてくる様子は、ただ見ているしか
ありませんでした。

試験操業への思い

平成24年の暮れに試験操業が始ま
りましたが、本格的に漁が再開されて
も地元の魚が忘れられてしまうので
はと強い危機感があります。そこで地
元で捕れる魚のどんこをつみれにし
た「どんこボール」を売出すことに
しました。どんこは、もともとは漁師
のまかない飯です。それを毎日食べて
いる漁師が「こうすればおいしい」と

地元ならではの価値を再発見

新しい価値を付けることで、どんこの
つみれが相馬の新しい名物になると
思っています。
生産者の食に対する思いと旬の食
材と一緒に届ける「そうま食べる通信」
では、ここでしか捕ることができない
魚や農作物のおいしさと素晴らしい生
産者がどんな思いで仕事をしている
か、どんな苦労をしているかを体験す
るツアーを組み、生産者と消費者のつ
ながりをつくっています。これからも
魚だけでなく、野菜や肉など地元の素
晴らしい素材を掘り起こし、新しい価
値を見つけていきたいと思っています。

菊地 基文さん [相馬市]
そうま食べる通信 共同編集長

相馬双葉漁業協同組合相馬原釜支所青壮年部の部長を務めながら、「そうま
食べる通信」の共同編集長として、地元の食の魅力在全国に発信している。



インタビュー

私たちの、 あの日・あの時・そして今



八島 妃彩さん [浪江町]
浪江まち物語つたえ隊

「浪江まち物語つたえ隊」の一員として県内外に出向き、
ふるさとの昔話や被災した体験を紙芝居で伝えている。

浪江の昔話を通して
ふるさとの良さを知ってほしい

防災無線が流れ、慌ただしく避難

幸いにして自宅は津波の被害を受け
ることはありませんでしたが、原発が
危機的状況に陥った3月12日早朝、避
難を促す防災無線が流れ、慌ただしく
弟の住んでいる相馬市に避難しまし
た。その後、山形県の天童市、二本松市
を転々とした後、桑折町の仮設住宅に
入居しました。

**語り部の佐々木ヤス子さんの
出会い**

浪江町にいるときから知っていた
佐々木ヤス子さんと、避難先のホテル
で偶然一緒になりました。佐々木さん
は避難している方に昔話をお話しされ
ていて、桑折町の仮設住宅に移ってか
ら一緒に語り部の活動を始めることに

なりました。佐々木さんが「少しでも避
難している方の心の慰めになれば」と
の思いでふるさとの昔話を語りはじめ
られたことに共感し、お手伝いをさせ
ていただくようになりました。

語り継いでいきたい浪江の昔話

広島市の市民団体「まち物語制作委
員会」が、福島に力を貸したいと言っ
てくださり、浪江の昔話や佐々木さんの
被災体験の手記を紙芝居にしてくれま
した。私はこの紙芝居を「浪江まち物語
つたえ隊」の一員として、仮設住宅など
で披露しています。佐々木さんは平成
24年に亡くなられましたが、佐々木さ
んの「活動を継続してほしい」という意
思を継いで、ふるさとの昔話や被災体
験を語り継いでいきます。



山木屋太鼓の存在
正直、最初はみんなが山木屋地区に戻ってくるものだと思っていました。しかし、移り住んだ環境によっては、そのまま暮らし続けたり、別の場所です生活するなど、それぞれの選択

突然の避難指示
当時は障がい者の授産施設に勤めていて、ボランティアの方々と一緒に建物から避難しました。地震の直後は携帯電話もメールもつながらない状態で、ひとまず山木屋地区にある自宅に戻りました。その後、原発事故が発生し、山木屋地区から避難するように指示があったものの、どこか他人事のような気がして、自分たちが離れなければならない意味がまだよくわかりませんでした。

山木屋太鼓の響きは 自分とふるさとの懸け橋



えん どう げん き
遠藤 元気さん[川俣町]
山木屋太鼓 会長

和太鼓を通してふるさとへの思いを伝える川俣町の山木屋太鼓の会長。震災後、地域の伝統芸能を後世に伝えるため太鼓のプロとして活動を始めた。

肢があると思います。今後、山木屋地区で暮らせるようになったとき、みんな一つになれるものが必要だと感じました。それが私の中では山木屋太鼓です。

仕事を辞めてプロへの転身

私は、山木屋太鼓がなければ福島を離れていたかもしれません。自分とふるさとを結びつけているものがこの山木屋太鼓だと思っています。

もちろん、小さい頃から慣れ親しんだ伝統ある山木屋太鼓を後世に残したいという気持ちもあります。小さい子どもたちに、プロの太鼓奏者になって地域の宝とも言える太鼓を伝えていく生き方もあることを知ってもらいたいです。



あい かわ ふみ お
会川 文雄さん[いわき市]
株式会社会川鉄工 代表取締役

震災後、県内企業と連携して再生可能エネルギーの研究を始め、「メイドイン福島」の技術力で風力発電タワーの製造に取り組む。



新しい事業に挑戦

先が見えない状態でしたが、福島県が再生可能エネルギー事業について方針を打ち出したことをきっかけに、風力発電事業に挑戦することを決めました。技術が進んでいるドイツへ視察に行ったことで「勉強することは多いが、これまで培ってきた自分たちの技術が復興に役立つ」と一筋の光明が見え、その後、風力発電タワーの製造に成功しました。

福島でがんばる意味
震災を経験したことで、「自分たちの会社が福島にある意味」を再認識しました。風力発電についてはまだまだ学ばなければいけません。これまでの経験や技術力を生かして、福島から「日本の底力」を見せることができたいと思っています。



**福島への思いを技術力に
託して底力を見せたい**

冠水した工場

東京の事務所が地震に遭い、テレビで津波の映像を見ても帰ることにしました。高速道路も走れない、一般道も寸断されているところがあって1日がかりで戻りました。事務所や工場は水浸しで、流されてきた車やがれきで手のつけようがなく、1カ月は現場の片付け作業に追われました。3カ月は過ぎて、ようやく仕事のことを考えられるようになりましたね。

きつと福島は蘇る。
 あの震災を乗り越えた
 逞しく優しい人たちの住むところだから。

※「東日本大震災の体験談と復興への想い」より
 県内在住の男性

平成23年3月11日14時46分18秒
 東北地方太平洋沖地震発生

2011



から はし ひろ ゆき
唐橋 裕幸さん [喜多方市]
 ほまれ酒造株式会社 代表取締役社長
喜多方市の酒蔵の経営者として、時代や消費者のニーズに合わせた酒造りに
 精力をそそぐ。

**福島への思いを
 酒造りに込めていきたい**

ブランド価値を磨いて風評払拭

震災当日は岩手県の花巻市に出かけており、家族や会社、酒蔵の無事を確認しながら10数時間かけて喜多方に戻ってきました。会津地方は思ったより被害が少なかったですが、商品が出荷できなかったり、井戸水が濁ったりということはありません。

原発事故以前に仕込んだお酒についてもすぐに検査機関に持ち込んで、安全性を証明できる体制を整えましたが、検査の内容が信用できないという方や、返品を申し出る方もおり大変悔しい思いをしました。この風評を払拭するには、圧倒的においしい酒を造り、ブランド価値を上げることしかないと思いました。これは、県内の酒蔵全てが同じ思いであつたと思います。

世界に認められた福島の酒

2015年の「インターナショナル・ワイン・チャレンジ」のSAKE部門最優秀賞「チャンピオン・サケ」の受賞、そして同じ喜多方市から夢心酒造や笹正宗酒造がトロフィーを受賞し、県内からも多数のメダルが生まれました。これは、福島の名を世界にポジティブな意味でアピールできた最高の出来事であると思えました。この審査は産地や銘柄などを完全に伏せて行われるので、最優秀賞のお酒が福島のお酒だったことを知った審査員が歓喜したと聞いて、とてもうれしかったです。

世界に向けた挑戦を続ける

今後は、チャンピオン・サケの連覇もあります。やはり福島県のお酒全体のブランド価値を高めるような取り組みが重要であると思います。福島といえはお酒、お酒といえは福島と思ってもらえるようにがんばります。

3年連続 全国新酒鑑評会 金賞受賞数日本一!



全国の日本酒の蔵元が新酒の出来栄を競い合う平成26酒造年度全国新酒鑑評会で、福島県産酒24銘柄が特に優秀であると認められ金賞に輝きました。

「IWC2015」で会津ほまれが最高賞受賞!



イギリスのロンドンで開催された「IWC(インターナショナル・ワイン・チャレンジ)2015」の「SAKE部門」において、最高賞の「チャンピオン・サケ」に「会津ほまれ 播州産山田錦仕込 純米大吟醸酒」が選ばれるなど国外でも高い評価を得ています。

大震災、大津波、 原子力災害、風評の 四重苦との闘い

3月11日の午後2時46分、日本観測史上最大のマグニチュード9.0の地震を観測。地震に続き、岩手県、宮城県、福島県の3県沿岸部は大津波により多大な被害を受けました。さらに、本県では、原発事故の影響により避難指示が出るなど、不安を抱える日々が続きました。

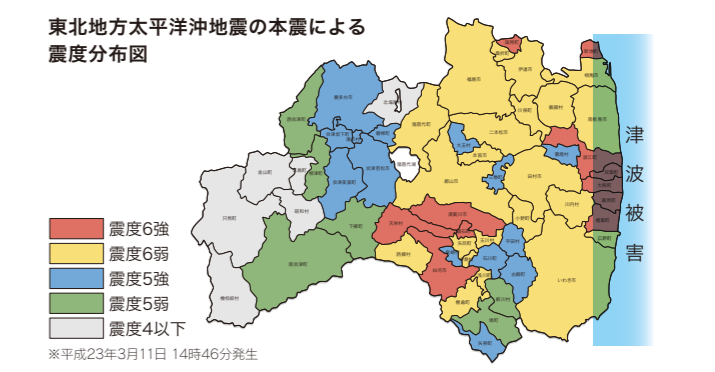
県では、避難者の支援をはじめ、被災施設の復旧、放射性物質のモニタリング、県民の健康管理、農産物や工業製品、観光などに対する風評への対応など、直面する課題の一つ一つ対応しましたが、新たな課題が次々に生じる苦悩の日々が続きました。



いわき市(江名港) がれきや粗大ごみがあふれかえる (写真提供: 福島民友新聞社)

東日本大震災 地震・津波の概要 (気象庁資料より)

- 【発生時間】平成23年3月11日午後2時46分
- 【震央地名】三陸沖
- 【震源の緯度/経度/深さ】
北緯=38度06分2秒/東経=142度51分6秒/深さ24km
- 【規模】マグニチュード9.0
- 【最大震度】震度7:宮城県栗原市
- 【本県における震度】震度6強:白河市、須賀川市、国見町、天栄村、富岡町、大熊町、浪江町、鏡石町、檜葉町、双葉町、新地町
震度6弱:福島市、二本松市、本宮市、郡山市、桑折町、川俣町、西郷村、矢吹町、中島村、玉川村、小野町、棚倉町、伊達市、広野町、浅川町、田村市、いわき市、川内村、飯館村、相馬市、南相馬市、猪苗代町
- 【余震活動の領域】



震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

3月

- 11日 ●東北地方太平洋沖地震発生
●大津波警報発令
●東京電力福島第一原子力発電所 (以下:第一原発)に津波が到達
●県災害対策本部設置
●県警察災害警備本部設置
●環境モニタリング開始
●第一原発半径3km圏内に避難指示、3～10km圏内に屋内退避指示
- 12日 ●第一原発1号機原子炉建屋で水素爆発
●第一原発半径20km圏内・第二原発半径10km圏内に避難指示
- 13日 ●気象庁が、東日本大震災のマグニチュード(M)を8.8から9.0に修正
マグニチュード9.0以上の地震は明治33年以降に発生した地震において、わずか数例を数えるにとどまっている。
- 14日 ●第一原発3号機水素爆発
- 15日 ●福島原子力発電所事故対策統合本部設置
●第一原発の半径20km～30km圏内に屋内退避指示
●第一原発4号機水素爆発
- 16日 ●小名浜港暫定供用開始
- 17日 ●陸上自衛隊による啓開(路上の障害物を取り除く)作業の開始
●陸上自衛隊が3号機使用済み核燃料プールにヘリコプターで水を投下(地上からは消防車両が放水)
●県警察による第一原発20～30km圏内での行方不明者の捜索開始
●県警察が高圧放水車で第一原発3号機に放水
- 19日 ●東京消防庁のハイパーレスキュー隊が第一原発3号機に放水
●相馬港暫定供用開始
- 20日 ●第一原発5・6号機が冷温停止
- 21日 ●ハウレンソウ、原乳等出荷制限
- 23日 ●応急仮設住宅着工
- 24日 ●東北道、磐越道の通行止め解除、全線通行可能に

未曾有の大震災



相馬市(松川浦漁港) 漁船が津波で流され、陸に打ち上げられた(写真提供:福島民友新聞社)



福島市 地震で倒壊した福島学院大学宮代キャンパス本館(写真提供:福島民友新聞社)

福島県内における東北地方太平洋沖地震の概況

最大震度	6強(11市町村で観測) ^{*1} 〔白河市、須賀川市、国見町、天栄村、富岡町、大熊町、浪江町、鏡石町、楮葉町、双葉町、新地町〕
最大継続時間	190秒(震度4以上)[いわき市小名浜] ^{*1}
最大加速度	1,435ガル(三成分合成値)[鏡石] ^{*2}
観測された津波	9.3m以上(相馬港 H23.3.11 15時51分) ^{*1}
災害救助法の適用	県内59市町村(全域) ^{*1}

^{*1} 気象庁発表資料による
^{*2} (独)防災科学技術研究所ホームページ掲載資料による



須賀川市 市役所庁舎2階の被災状況



平成23年3月12日付け 福島民友特別紙面



いわき市(小名浜港) 引き波により岸から流れる漁船(写真提供:福島民友新聞社)

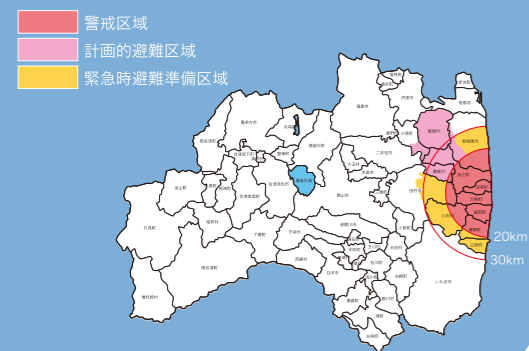
震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

一変した日常生活

4月

- 1日 ●大地震による災害の名称を「東日本大震災」と閣議決定
- 2日 ●第一原発2号機で高濃度汚染水が海へ漏出していることが判明
- 3日 ●県警察による第一原発10～20km圏内での行方不明者の捜索開始
- 4日 ●第一原発施設内にある放射性物質を含む汚染水の海への放出開始
- 5日 ●相双地方8県立高校サテライト校設置方針決定
- 11日 ●本県、茨城県で震度6弱の地震
- 12日 ●経済産業省原子力安全・保安院が、第一原発事故の深刻度を国際評価尺度(INES)の暫定評価で最悪の「レベル7」と評価
「レベル7」は、昭和61年に旧ソ連で起きたチェルノブイリ原子力発電所の事故と同じレベル
- 14日 ●「東日本大震災復興構想会議」が初会合
●県警察による第一原発10km圏内での行方不明者の捜索開始
- 17日 ●東京電力が事故収束に向けた工程発表
- 18日 ●自衛隊による第一原発30km圏内での行方不明者の捜索を開始
- 20日 ●コウナゴ(イカナゴの稚魚)出荷制限指示
- 21日 ●応急仮設住宅入居開始
●第二原発避難指示を半径10kmから8km圏内に変更
- 22日 ●第一原発半径20km圏内を警戒区域に設定
●緊急時避難準備区域及び計画的避難区域の設定
- 24日 ●県警察による第一原発5km圏内での行方不明者の捜索開始

避難指示等区域設定状況(平成23年4月22日時点)



須賀川市 地震により決壊した藤沼湖(写真提供:県警察)



福島市 県災害対策本部の様子



浪江町 避難する車で渋滞する国道114号(写真提供:浪江町)



県災害対策本部に掲示された応援メッセージ



浪江町 県警察による第一原発10km圏内での行方不明者の捜索(写真提供:県警察)



平成23年3月12日付け 福島民報号外(共同通信配信)



南相馬市 自衛隊による捜索活動(写真提供:陸上自衛隊)



相馬市 避難所で日用品や食料品などが配られた

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

原子力災害



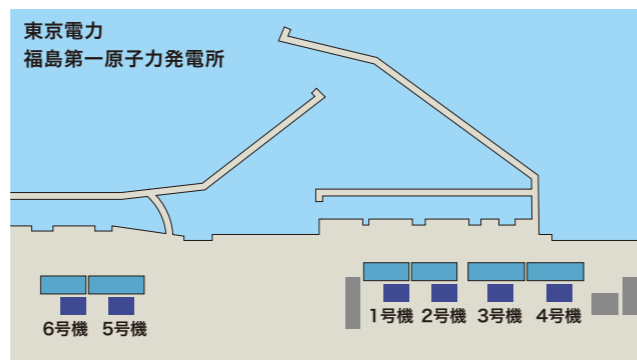
第一原発を襲った津波により施設が損壊(写真提供:東京電力株式会社)



第一原発4号機に放水車から注水(写真提供:東京電力株式会社)



陸上自衛隊による第一原発3号機への放水(写真提供:陸上自衛隊)



第一原発に津波が押し寄せる(写真提供:東京電力株式会社)



爆発後の第一原発4号機の外観(写真提供:東京電力株式会社)



爆発後の第一原発1号機の外観(写真提供:東京電力株式会社)



第一原発4号機の外観(平成25年10月撮影)



第一原発1号機の外観(平成27年10月撮影)

5月

- 8日 ●福島市の幼稚園の庭で、表土と下層の土を入れ替える上下置換工法を文科省が実地検証。放射線量が10分の1に下がる効果
- 10日 ●川内村の住民が防護服と線量計を付けて一時帰宅
●住民の一時立入に合わせて被災ペットの保護活動を開始
- 11日 ●天皇后両陛下ご来県
両陛下は福島空港に自衛隊機でご到着。福島市の体育館で避難生活を続けている方々を慰問。避難者にお見舞いの言葉をかけられた。
- 21日 ●日中韓3首脳来県、避難所訪問
- 27日 ●県民健康管理調査実施



6月

- 6日 ●経済産業省原子力安全・保安院は第一原発1～3号機がメルトダウンしたとする解析結果を発表
- 7日 ●小名浜港へ外航船入港再開
- 16日～18日 ●震災から100日目を迎え、県警察が第一原発の沿岸部に延べ約900名を投入し、行方不明者の捜索を実施
- 17日 ●秋篠宮同妃両殿下ご来県
- 18日 ●いわき市で合同供養祭
- 20日 ●復興基本法が成立
東日本大震災からの復興を円滑かつ迅速に推進するため、組織や財源など基本的な枠組みを定める「復興対策本部」を内閣に設置。
- 23日 ●環境省が県内の災害廃棄物の処理方針を取りまとめる
- 25日 ●「東日本大震災復興構想会議」において復興提言書が決定
- 27日 ●ホールボディカウンターによる内部被ばく検査開始

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

7月

- 8日 ● 県産牛肉から暫定規制値を超える放射性セシウム検出
- 「ふくしまの子どもを守る緊急宣言」発表
- 10日 ● 本県などで震度4の地震、相馬で10cmの津波観測
- 15日 ● 「環境水族館アクアマリンふくしま」再開
震災から126日ぶりに営業を再開。再開にあたり、全国の水族館や動物園から新たな魚類や生き物が約300種約2万点が集まった。
- 26日 ● 新潟・福島豪雨発生
- 皇太子同妃両殿下ご来県
皇太子同妃両殿下は、郡山市内の避難所や仮設住宅を訪れ、お見舞いの言葉をかけられた。
- 28日 ● 県内牛の全頭検査発表

8月

- 3日 ● 全国高等学校総合文化祭「ふくしま総文」開幕
- 4日 ● 秋篠宮同妃両殿下ご来県
- 8日 ● 相馬港への外航船入港再開
- 潘基文(パンギムン)国連事務総長来県
福島市の避難所や、県立双葉高等学校の生徒がサテライト校としている県立福島南高等学校を訪れ、励ましのメッセージを伝える。また、相馬市を訪問して津波による被災の現場も視察。
- 11日 ● 県復興ビジョン策定
- 17日 ● 福島の農林水産物の安全性と魅力を紹介する「ふくしま 新発売。」開始



- 24日 ● 政府の福島除染推進チームが発足
- 25日 ● 本県などの肉牛出荷停止解除
- 26日 ● 第一原発3km圏内初の一時帰宅
- 30日 ● 除染や汚染廃棄物処理の枠組みを定める放射性物質汚染対処特措法公布・一部施行
- 31日 ● 本県の7月1日現在の推計人口が200万人を割り込む



福島市 避難所を訪れお見舞いの言葉をかけられる天皇陛下



福島市 避難所を訪れお見舞いの言葉をかけられる皇后陛下



川内村 一時帰宅のため警戒区域内へ(写真提供:県警察)



川内村 一時帰宅のため防護服に着替える住民(写真提供:福島民報社)



いわき市 津波被害にあった平豊間地区をご視察になる秋篠宮同妃両殿下



郡山市 仮設住宅の住民にお見舞いの言葉をかけられる皇太子同妃両殿下

震災、そして復興へ
～ 5年間の歩み～

9月

- 8日 ●野田首相来県、知事と会談
- 11日 ●世界14カ国の放射線医学や放射線防護学の研究者、国際機関の専門家による国際会議が県立医大で開催
- 14日 ●震災の津波で殉職、行方不明となった警察官の県警察葬
- 30日 ●原発事故調設置法が成立
●緊急時避難準備区域を解除

10月

- 3日 ●「フラガール」が本県復興の象徴として観光庁長官表彰を受賞
- 9日 ●県民健康管理調査で、18歳以下の甲状腺検査が始まる
- 14日 ●第一原発1号機建屋カバー設置完了



(写真提供: 東京電力株式会社)

- 16日 ●政府が福島市で除染に関する国際シンポジウムを開催
- 18日 ●野田首相が大玉村の仮設住宅、郡山市の幼稚園を訪問
- 25日 ●ウルフ・ドイツ大統領来県
- 28日 ●原子力委員会専門部会が福島第一原発の廃炉終了まで「30年以上かかる」との見通しを示す
●県および県内全市町村ほか、観光、経済、報道など全98団体による県観光復興キャンペーン委員会が設立



(写真提供: 福島民友新聞社)

復興のあゆみ



会津若松市 希望と再生への思いを全国に発信した「全国高等学校総合文化祭」



いわき市 震災から126日ぶりにオープンした「環境水族館アクアマリンふくしま」(写真提供: 福島民友新聞社)



東京都 復興支援のため全国キャラバンを展開する「フラガール」



福島市 応急仮設住宅で行われた健康相談

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

11月

- 10日 ●震災で延期の県議会議員選挙告示
- 12日 ●政府と東電は事故後初めて第一原発を報道陣に公開
- 14日 ●自主検査の結果、県産米から暫定規制値を超える放射性セシウム検出
- 福島県面的除染モデル事業開始
- 18日 ●ブータン国王王妃両陛下ご来県
ブータン国王王妃両陛下は相馬市桜丘小学校で、児童とご懇談。また、相馬港原釜・尾浜地区、原釜・尾浜海水浴場を訪れ、被災状況の説明を受けられた。
- 25日 ●観光物産センター「いわき・ら・ら・ミュウ」再オープン
- 26日 ●国際放射線防護委員会(ICRP)が福島市でセミナー開催



新地町 津波で押しつぶされたJR常磐線の車両(平成23年3月撮影) [写真提供:福島民友新聞社]



福島市 ブータン国王王妃両陛下ご来県

12月

- 5日 ●県と環境省がペット救出目的の民間団体に警戒区域への立ち入りについてガイドラインを公表
- 7日 ●陸上自衛隊が警戒区域の楡葉、富岡、浪江3町と計画的避難区域の飯館村の役場除染開始
- 9日 ●復興庁設置法成立
- 15日 ●いわき市に役場機能を置く広野町議会が避難から9カ月ぶりに町役場で定例議会を開催
- 16日 ●政府は廃炉に向けた工程表ステップ2完了と発表
- 19日 ●国会の原発事故調査委員会が福島市で初会合
- 21日 ●JR常磐線原ノ町一相馬駅間運転再開
- 26日 ●政府の事故調査・検証委員会が中間報告公表
- 28日 ●県復興計画(第1次)策定
- 県内の1次避難所閉鎖
「1次避難所」のうち、最後まで残っていた南相馬市と会津若松市の計2カ所が28日閉鎖。1次避難所に区分されたのは学校や体育館などであったが、3月16日時点で403カ所に7万3,608人が一時避難していた。
- 汚染廃棄物対策地地域・除染特別地域・汚染状況重点調査地域指定



南相馬市 約9カ月ぶりに運行を運転したJR常磐線原ノ町駅(写真提供:福島民友新聞社)



富岡町 陸上自衛隊による富岡町役場の除染(写真提供:福島民友新聞社)



いわき市 津波被害から復旧した「いわき・ら・ら・ミュウ」(写真提供:福島民友新聞社)

それぞれの家族

1

「私たちが贈る、未来へのメッセージ」



「笑顔、楽しみがいっぱい集まる場所になればいい」

相馬松川浦の名産である青のりの加工場に勤めていた高橋さんは、ここで地震に遭いました。当時の様子を尋ねると「大きな揺れで慌てて外に出ました。防災無線で津波の情報が流れて、くり返し流れる情報から予想される津波の高さがどんどん増していき、危険を感じて逃げました」と、絶え間なく変わる状況が感じられました。

平成26年11月にNPO法人みんな共和国の活動の一環として、震災後、子育て世代の憩いの場となる「子育て応援37カフェ」をオープンし、運営している高橋さん。「震災から5年。以前のような日常に戻ったように見えて大きく違っています。避難したり家族が離れて暮らす中、子育ての相談役になる人が足りない。そこでこのカフェをみんなが集まる場所にしようと思いました」。

子育て応援37カフェは平日に平均で20人ほどが利用しています。その大半は地元のお母さんや避難先から地元に戻った住民の皆さん。休日ともなると利用者はさらに増えます。

高橋さんは、「震災のことで暗くなった不安になることは仕方ありませんが、これからは明るく笑顔にならないといけません。心に余裕ができれば働くことも楽しむことができます。それが地域をより良いものにしていきます。肩肘張るより何でも楽しみたい。そしてこのカフェがみんなの笑顔や楽しみが集まる場所になつてくれるとうれしいです」と話してくれました。

南相馬市在住

高橋 慶さん
由佳さん
明日珂ちゃん

亡くなった方達の思いを胸に、

努力する歩みを止めてはなりません。

復興は人任せでなく、

自分達で築き上げていくものだと思います。

※「東日本大震災の体験談と復興への想い」より

県内の中学生

2012

震災、そして復興へ ～5年間の歩み～

1月

- 1日 ●放射性物質汚染対処特措法が全面施行
- 4日 ●環境省、「福島環境再生事務所」を福島市に開設
- 17日 ●常陸宮同妃両殿下ご来県
- 18日 ●南相馬市原町区で東日本大震災県消防殉職者慰霊式
- 20日 ●環境省と県、「除染情報プラザ」を設置
- 31日 ●川内村、帰村宣言

2月

- 1日 ●福島市に「ふくしま心のケアセンター」を開設
- 2日 ●知事、平成24年度当初予算について過去最高となる1兆5,764億円の計上を発表
- 6日 ●県が首都圏で県産米のPRを再開
- 7日 ●「企業立地セミナー」を開催
- 8日 ●「スパリゾートハワイアンズ」、全館営業再開
- 東電が震災後初めて第二原発内を報道陣に公開
- 復興庁が発足。福島市に復興局を設置、南相馬、いわき両市に支所を開設
- 11日 ●相馬野馬追執行委員会は2012年の野馬追を震災前の規模に戻すと決定
- 12日 ●復興を祈念して「いわきサンシャインマラソン」開催
- 19日 ●県外からの出向警察官らで編成した県警「特別警ら隊」と双葉署が警戒区域集中捜索を実施



(写真提供:県警察)

- 27日 ●南相馬市原町区の小・中学校で11カ月半ぶりの自校授業



いわき市 震災のため休館していたスパリゾートハワイアンズが営業を再開 (写真提供:福島民友新聞社)

2012年 (平成24年)

復興への道 を進み始めた

「ふくしまからはじめよう。」を合言葉に、「復興元年」を掲げ、明るい話題も増え始めました。
2年ぶりに本祭りが行われた相馬野馬追、全国の祭りが一堂に会した「ふるさとの祭り2012」が開催され、地域の文化や誇りをつないでいくことの大切さを感じるとともに、本県は着実に元気を取り戻し始めました。
県内各地で被災施設の復旧が進み、県産桃の海外輸出が震災後初めて再開されるなど、復興に向けた取り組みも少しずつ形になって現れてきました。



いわき市 復興を祈念して「いわきサンシャインマラソン」開催



郡山市 小学校の校庭を表土除去 (写真提供:福島民友新聞社)



福島市 弁天山公園における除染ボランティア活動



福島市 除染が完了し校庭で遊ぶ小学校の子どもたち

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

3月

- 1日 ● 広野町、1年ぶりに本来の庁舎で業務を開始
- 4日 ● 楡葉、双葉の両町がそれぞれ町民の追悼式、慰霊式
- 11日 ● 「東日本大震災犠牲者追悼式」開催
● 知事が再生可能エネルギーの推進や、原子力に頼らず持続的に発展する社会を目指す「ふくしま宣言」を発表
● 新スローガン「ふくしまから はじめよう。」発表



- 20日 ● 「がんばろうふくしま! 大交流フェア」開催
- 22日～25日 ● 「第5回声楽アンサンブルコンテスト全国大会2012」開催
- 30日 ● 福島復興再生特別措置法成立

4月

- 1日 ● 避難指示解除準備区域(田村市、川内村)と居住制限区域(川内村)に再編
- 7日 ● 春の福島競馬が503日ぶりに再開
- 8日 ● 常磐自動車道「南相馬～相馬IC」(延長14.4km)が開通
- 16日 ● 避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編(南相馬市)

5月

- 2日 ● 相馬市の高齢者向け共同住宅、相馬井戸端長屋1号棟が完成。被災者が入居する県内最初の公営住宅
- 4日 ● 15歳未満の県内の子どもは25万6,908人で、前年同期と比べ1万5,494人減り、減少数は例年の2倍以上
- 12日 ● 福島海上保安部と県警察は、南相馬市小高区の小高川河口海域で、震災行方不明者を合同捜索
- 23日 ● 北塩原村で「関東知事会」開催



東京都 「がんばろうふくしま! 大交流フェア」開催



福島市 2年ぶりに開催された「第5回声楽アンサンブルコンテスト全国大会2012」



福島市 503日ぶりに再開した春の福島競馬 (写真提供:福島民友新聞社)



福島市 犠牲者への追悼と、復興に向けて希望の灯がともされたキャンドルナイト



福島市 東日本大震災犠牲者追悼式・復興の誓いシンポジウム



富岡町 警戒区域内で満開になった桜 (写真提供:県警察)

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

6月

- 1日 ●県赤ちゃん電話相談開始、母乳検査受け付け
- 震災後に休館していたビッグバレットふくしま(郡山市)が再オープン
- 12日 ●県民健康管理調査で、県は県北、県中、会津、南会津、相双の5地域の住民の外部被ばく線量の推計結果を公表
- 16日 ●福島市で夏の福島競馬が2年ぶりに開幕
- 18日 ●県公式 Facebook「ふくしまから はじめよう。」開設(平成28年3月現在で60,000超の「いいね!」を獲得)
- 22日 ●コウナゴ(イカナゴの稚魚)の出荷制限指示解除、相馬沖でタコヤツ貝を対象とした試験操業が開始
- 26日 ●相馬沖の試験操業で水揚げされたタコヤツ貝などの、ゆでた加工品の販売開始



相馬市 試験操業初水揚げ



イギリス ロンドンのホーランド・パークで日本庭園「福島庭園」の開園式

7月

- 4日 ●世界防災閣僚会議in東北福島市で分科会の開催
- 10日 ●ヒラメ稚魚放流が相馬市磯部沖で再開
- 16日 ●いわき市勿来海水浴場が、2年ぶりに海開きを実施
- 17日 ●避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編(飯館村)
- 24日 ●ロンドンのホーランド・パークで日本庭園「福島庭園」の開園式
- 27日 ●国直轄で行う本格除染が田村市都路町の避難指示解除準備区域で開始
- 28日 ●相馬野馬追2年ぶりに通常開催



相馬市 震災犠牲者の鎮魂や復興を願い出陣する騎馬武者(写真提供:福島民友新聞社)



相馬市・南相馬市 2年ぶりに通常開催された「相馬野馬追」

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

8月

- 1日 ●政府は「エネルギー・環境の選択肢に関する福島県民の意見を聴く会」を福島市で開催
- 10日 ●避難指示解除準備区域に再編(楡葉町)
海域の警戒区域 浪江、双葉、大熊、富岡4町の沿岸から沖合約5kmの範囲に縮小
- 11日 ●津波で全壊した「道の駅よつくら港」が、改装して再オープン
- 12日 ●「かわうち復興祭2012」開催



(写真提供:川内村)

- 25日 ●米の全量全袋検査開始



二本松市 県産米の全量全袋検査を開始



玉川村 中国東方航空の震災後初のチャーター便が福島空港に到着

9月

- 4日 ●政府は双葉郡など避難区域の将来像をまとめたグランドデザインを発表
- 10日 ●相馬沖の試験操業で、対象を10魚種に拡大
- 14日 ●中国東方航空の震災後初のチャーター便が福島空港に到着
- 19日 ●原子力規制委員会発足
- 21日 ●原発事故からの農業復興に取り組む夫婦7組、2団体、1人に第53回県農業賞授与



- 24日 ●県は、日常食の放射性物質モニタリング調査結果を発表
- 30日 ●被災地支援を目的とした「法テラス二本松支所」開所



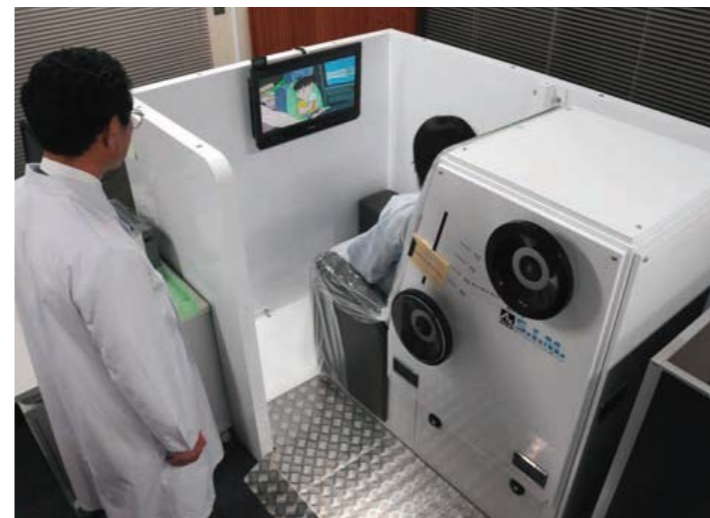
相馬市 相馬沖の試験操業で対象魚種を拡大して水揚げ



いわき市 津波で全壊した道の駅よつくら港(平成23年3月撮影)



いわき市 新しく生まれ変わり再オープンした道の駅よつくら港(平成24年8月撮影)



福島市 内部被ばくを調べるホールボディカウンターでの検査(写真提供:福島民報社)



福島市 県衛生研究所における加工食品の放射性物質検査

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

10月

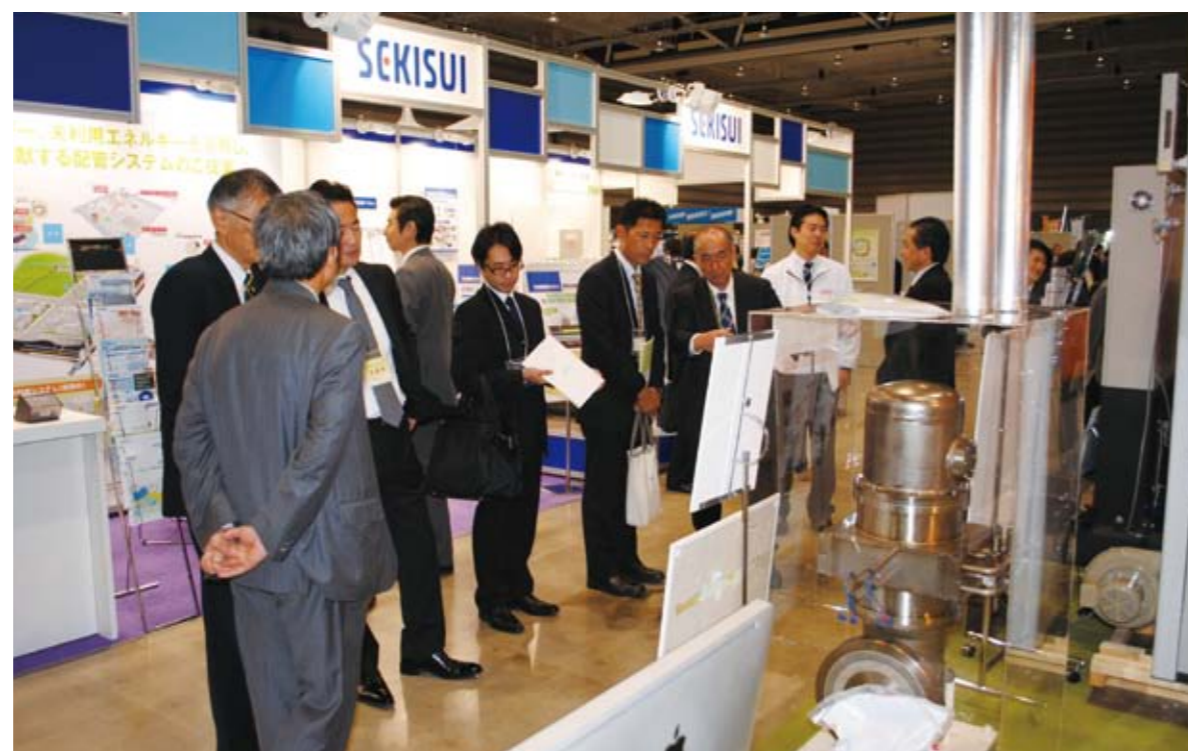
- 1日 ●18歳以下の子どもの医療費無料化開始
- 13日 ●天皇皇后両陛下ご来県
川内村を訪れ、放射能汚染の除染現場を初めてご視察。自宅が旧警戒区域にあるため戻れず、仮設住宅で暮らす住民にお見舞いの言葉をかけられた。
- 16日 ●広野町に原子力規制委員会の現地本部「原子力規制事務所」開設
- 27日 ●高円宮妃殿下ご来県
- 27日～28日 ●「地域伝統芸能全国大会福島大会ふるさとの祭り2012」開催



会津若松市 「地域伝統芸能全国大会福島大会ふるさとの祭り2012」開催(請戸芸能保存会による「請戸の田植踊」)

11月

- 1日 ●復興特区法に基づく県内初のリハビリテーション事業所「浜通り訪問リハビリテーション」(南相馬市)が開所
- 7日 ●「ふくしま復興・再生可能エネルギー産業フェア2012」開催
- 16日 ●被災地復興を願い、日本女子プロゴルフ協会公認トーナメントがいわき市で開幕



郡山市 ビッグパレットふくしまにて「ふくしま復興・再生可能エネルギー産業フェア2012」開催(写真提供:福島民報社)

12月

- 2日 ●日本オリンピック委員会は被災地を応援する「がんばれ!ニッポン!」プロジェクトを行う。浪江町民が避難する二本松市にレスリングの吉田沙保里選手ら8人が訪問
- 3日 ●相馬双葉漁協が試験操業で松川浦漁港に鮮魚の初水揚げ
- 10日 ●避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編(大熊町)
- 15日 ●政府と国際原子力機関共催の福島閣僚会議が郡山市で開催
- 21日 ●アジアナ航空の震災後初のチャーター便が福島空港に到着
- 28日 ●県復興計画(第2次)策定



玉川村 震災以降、ソウル定期路線を運休しているアジアナ航空の初のチャーター便で福島空港に韓国からの観光客が到着



相馬市(原釜) 津波の影響で海から離れた道路脇まで流された漁船(平成23年3月撮影)



相馬市(尾浜) がれきや粗大ごみがあふれかえる(平成23年3月撮影) [写真提供:福島民友新聞社]



相馬市(原釜) 船やがれきが撤去された(平成24年11月撮影)



相馬市(尾浜) がれきや粗大ごみが撤去された(平成24年11月撮影)

ふくしま

MESSAGE TO FUKUSHIMA

1

思いを込めて

4つの温泉地の若旦那たちが、平成27年に期間限定でJR福島駅前にオープンした「若旦那カフェ」



土湯温泉から始まったプロジェクトは、福島県内から全国に広がった。



平成27年の「ふくしまステーションキャンペーン」を盛り上げようと街頭に立つ若旦那。

若旦那プロジェクト実行委員会 会長
わたなべりお
渡邊 利生さん

風流天流太子の湯 山水荘 常務取締役兼企画室室長を務めながら、福島市内の温泉地の若旦那と連携し、県内の観光業を盛り上げている。



失いかけた自信と信頼を
取り戻す

震災の日は、大学の卒業を間近に控え、東京にいました。あんな大きな揺れは生まれて初めての経験で、テレビなどで福島状況を知り心配でたまりませんでした。その後就職が決まっていた旅館で2年間働いて実家に戻りました。原発事故の影響で宿泊のキャンセルが相次ぎ、従業員はやり場のない憤りを抱えて接客を続けていたので、「このままではお客さまの信頼を失う。いま新しい旅館として生まれ変わる意識を全員で持とう」と伝えました。震災が意識を見直すきっかけだったのかも知れません。

若旦那ファンは福島のファン。
そうやってほしい

福島に戻ってきてショックを受けたのは、子どもの頃に、にぎわっていた街が閑散としていること。このまま黙っているわけにはいかないと

旅館の若旦那で福島を活気づける術を模索し、「ふくしま若旦那プロジェクト」を立ち上げ、私たちが若旦那が前面に出て福島をPRする事業を始めました。私たち若旦那が全面に出る『若旦那図鑑』を発刊することになったのですが、自分たちが登場して大丈夫かと半信半疑でした。しかし、想像を超える反響で地元や全国のメディアに取り上げられ、たちまち話題になりました。お客さまの中には「若旦那に会いに来た」と言ってくださる方もいて、照れくさいです。

若旦那プロジェクトは土湯のほか飯坂、高湯、岳の4温泉街の若旦那と一緒に、福島にお客さまを呼びこもうとがんばっています。若旦那たちに興味を持って福島に来てもらう、それが今できることだと思います。



全国的に話題になった「若旦那図鑑」。福島市内の大学生が制作を担当している。

私はこれからも

「福島のためにできること」について考えていきます。

なぜなら、この故郷福島が好きだからです。

※「東日本大震災の体験談と復興への想い」より

県内の高校生

2013

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

1月

- 6日 ●大河ドラマ「八重の桜」放映開始
- 8日 ●公立小中学校で3学期始業式。楢葉町の3小中学校は、いわき市中央台に完成した仮設校舎で授業
- 13日 ●原発事故により役場機能を移転する5町村を含む38市町村で成人式
- 27日 ●大相撲幕内優勝力士に県知事賞を授与

2月

- 1日 ●福島市の花見山、2年ぶりに全面開放
- 5日 ●世界9カ国から19の県人会が参加して、初の「在外県人会サミット」開催。福島県の復旧・復興の正確な情報を各国に発信することを表明
- 9日 ●相馬市で、東北中央自動車道「相馬福島道路」のうち「相馬西道路」(延長6km)の起工式
- 10日 ●ミュージックフロムジャパン「2013年音楽祭・福島」が福島市で開催。飯舘村の小学生がふるさと再生を願い歌唱
- 11日 ●南相馬市原町区萱浜行政区の慰霊塔が建立し除幕式

3月

- 2日 ●警戒区域の双葉町で津波犠牲者、避難先で亡くなった町民の追悼式
- 9日 ●鶴ヶ城プロジェクションマッピング「はるか」開催
- 22日 ●避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編(葛尾村)
- 25日 ●避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編(富岡町)



会津若松市 復興への願いを込めて鶴ヶ城に投影された大型プロジェクションマッピング(写真提供:会津若松市)



福島市 桜の名所として知られる花見山公園が花木の養生を終えて2年ぶりに一般公開



東京都 大相撲初場所幕内優勝した横綱日馬富士関に県知事賞を授与

2013年 (平成25年)

取り戻し始めた
元気とにぎわい

会津のハンサムウーマン新島八重の生涯を描いた大河ドラマ「八重の桜」の効果もあり、県内の観光地やイベント会場には多くの方が来場し、子どもたちの元気な声が聞こえるようになってきました。
広野・楢葉沖の浮体式洋上風力発電の運転開始、復興公営住宅の着工など、「新生ふくしま」の柱となる事業が進展し、農林水産物についてもあんぽ柿の出荷が3年ぶりに再開されるなど、復興の流れがより大きく、確かなものになってきました。



会津若松市 「ハンサムウーマン八重と会津博 大河ドラマ館」が開館(写真提供:会津若松観光ビューロー)



福島市 海外の福島県人会の会長などを招いた「在外県人会サミット」開催(写真提供:福島民報社)

震災、そして復興へ
～ 5年間の歩み～

4月

- 1日 ●避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編(浪江町)
- 18日 ●原発事故後に大幅に減少した県内での里帰り出産が回復傾向であることが県産婦人科医会の調査で判明
- 20日 ●復興のシンボル「はるか」桜の植樹式開催
- 22日 ●県の4月1日現在の推計人口は194万9,595人で昭和50年以来38年ぶりの195万人割れ



いわき市 双葉町役場仮庁舎いわき事務所が開所(写真提供:福島民報社)



白河市 大河ドラマ「八重の桜」のヒロイン綾瀬はるかさんが命名した「はるか」桜植樹式(写真提供:fukushimaさくらプロジェクト)

5月

- 9日 ●秋篠宮同妃両殿下ご来県
- 10日 ●震災と原発事故に伴い体調悪化などで亡くなった本県の「震災関連死」人数は3月末現在、1,383人で全国の2,688人に対し51.5%と初めて半数を超えた
- 11日 ●定期路線が運休している福島空港-ソウル間でチャーター便を複数運航すると発表
- 28日 ●避難指示解除準備区域、帰還困難区域に再編(双葉町)。平成23年4月に第一原発から20km圏に設定された警戒区域は全て解除



福島市 来場者を魅了したブルーインバルス(写真提供:福島民友新聞社)

6月

- 1日 ●東北の六大祭りが競演する「東北六魂祭」が福島市で開幕。2日間で計約25万人が来場
- 11日 ●県警察による月命日の特別捜索開始(現在も毎月11日に実施)
- 17日 ●双葉町が、役場機能を埼玉県加須市からいわき市東田町に移し、仮庁舎「いわき事務所」で開所式



浪江町 県警察による月命日の特別捜索(写真提供:県警察)



福島市 東北の六大祭りが競演する「東北六魂祭」開催(写真提供:福島民報社)

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

7月

- 1日 ●原発事故の影響で中断していたアワビ稚貝の放流が、いわき市の沿岸部海域で再開
- 19日 ●県立医大が、原発事故後の県内での妊娠と出産で、放射線の影響は見られないとする調査結果を発表
- 22日 ●天皇皇后両陛下ご来県
飯館村の工場や小学校などをご訪問

8月

- 8日 ●汚染水が海に流出している問題を受け、相馬双葉漁協は9月再開予定の沖合底引き網漁とシラス漁の試験操業を延期する方針を固めた
- 避難指示解除準備区域、居住制限区域に再編(川俣町)
- 17日～20日 ●全国中学校バドミントン大会で猪苗代中学校が3年連続アベック優勝

9月

- 8日 ●震災からの復興を目的の一つに掲げる東京オリンピック(2020年)の開催が決定
- 10日 ●田村市都路町の避難指示解除準備区域で稲刈り始まる。第一原発から半径20km圏内の旧警戒区域で出荷用のコメが初収穫
- 21日 ●「ご当地キャラこども夢フェスタin白河」開催
- 22日 ●皇太子同妃両殿下ご来県
双葉町からの避難者が暮らす郡山市の仮設住宅などをご訪問
- 24日 ●県漁業協同組合連合会は、汚染水問題のため8月に中断した試験操業の再開を正式決定
- 25日 ●旧緊急時避難準備区域でコメの作付けを再開し、3年ぶりにコメを出荷する広野町の平成25年産米の全量全袋検査が楢葉町で開始



田村市 出荷用のコメを3年ぶりに収穫(写真提供:福島民友新聞社)



楢葉町 3年ぶりに出荷される広野町のコメの全量全袋検査(写真提供:福島民報社)



いわき市 稚貝が入った網を運ぶ漁業者(写真提供:福島民友新聞社)



白河市 全国のご当地キャラが集結した「ご当地キャラこども夢フェスタin白河」



静岡県 全国中学校バドミントン大会で猪苗代中学校が3年連続アベック優勝(写真提供:猪苗代中学校)

震災、そして復興へ
～ 5年間の歩み～

10月

- 18日 ●いわき沖で16魚種を対象とした試験操業が開始
- 31日 ●震災により発生したコンクリートがれきを利用した海岸堤防がいわき市の夏井川河口付近に完成。地元小学生らが記念植樹

11月

- 8日 ●三笠宮家の寛仁親王妃信子さまがご来県
- 10日 ●ご当地グルメによるまちおこしイベント「第8回 B-1グランプリ」で「なみえ焼そば」を出品した浪江町の「浪江焼麺天国」がゴールドグランプリに輝く
- 12日 ●津波で甚大な被害を受けた浪江町の請戸漁港で災害復旧工事開始。福島第一原発事故による旧警戒区域の漁港では初
- 16日 ●相馬市で東北中央自動車道「相馬福島道路」のうち「阿武隈東-阿武隈」(延長5km)の起工式



12月

- 2日 ●原発事故の影響で加工自粛していた県北地方の特産物「あんぼ柿」が3年ぶりに出荷
- 17日 ●震災と原発事故による避難などが要因で亡くなったとして、県内の市町村が震災関連死と認定した死者数が1,605人となり、地震や津波による直接死1,603人を上回ったと判明
- 20日 ●立命館大学と連携協力に関する協定締結



京都府 立命館大学と復興に向けた教育・研究分野での連携協力に関する協定を締結



愛知県 「B-1グランプリ in 豊川」で「なみえ焼そば」を出品した「浪江焼麺天国」がゴールドグランプリを受賞 (写真提供:浪江焼麺天国)



伊達市 県北地方の特産品、冬の味覚「あんぼ柿」の加工再開 (写真提供:JA伊達みらい)



いわき市 漁業再開に向けて、いわき沖で試験操業開始



伊達市 放射性物質検査を行い安全性を確認して出荷される「あんぼ柿」 (写真提供:福島民報社)

それぞれの家族

2

「私たちが贈る、未来へのメッセージ」



「都会ではあじわえない贅沢な時間があります」

今後、私たちはいかなる困難に直面しても、
きつとやり抜くことができます。
ほのかな希望の光を実現させる力があります。
それが培われた福島県民の絆の力です。

※「東日本大震災の体験談と復興への想い」より
県内在住の男性

現在、田村市滝根町で暮らす、福福和之さんと由梨さんご夫妻。東京で管理栄養士をしていた由梨さんは、「同じ野菜なのに産地によってこんなに味が違うのか」と衝撃を受けて農業に興味を持ち、農業体験ツアーに参加しました。そして、ツアーの訪問先の一つが滝根町の和之さんのところでした。

「何度か手伝いに通ううちに、この街と一緒に暮らすことを考えるようになって結婚することになった」と由梨さんは、はにかみながら和之さんと笑います。ところが結婚式の前日に震災が発生し、混乱のなか式は執り行われましたが、由梨さんは一年ほど東京と滝根町を行き来する生活を続けました。

現在おふたりは自宅の隣に設けた加工場で、無農薬で栽培した黒米の甘酒や黒米を練り込んだうどん、ブルーベリーのジャムなどの加工・販売をしています。「商品開発は試行錯誤。でもそれが楽しい」と和之さん。

将来の夢を尋ねると、「農家民宿をやりたい」と、都会で暮らす人に「田舎の豊かさ、農業の楽しさを体験してもらおう場を提供したい」と話してくれました。最後に和之さんが「今の時代、この暮らしが不便とは思いません。私たちの娯楽は温泉へ行ったり、鳥のさえずりを聞いたりすること。夜空を見上げれば満天の星と幾つもの流れ星がある場所なんて、贅沢だと思いませんよ」と、今の生活を満喫している笑顔を見せてくれました。

田村市在住

和之さん
由梨さん

福福

2014

2014年

見え始めた復興の光

避難指示の解除・見直し、国道6号線の全面自由通行再開、常磐道における新たな区間の開通など、避難地域の復興の弾みとなる出来事が続きました。
「新生ふくしま胎動の年」として、再生可能エネルギーや医療関連産業など福島
未来を切り拓く拠点整備も進み始め、新しい「ふくしまの芽」が顔を出し始めました。



郡山市 産業技術総合研究所「福島再生可能エネルギー研究所」が開所



玉川村 福島空港敷地内に「福島空港メガソーラー」が竣工



東京都 福島ユナイテッドFCのJ3開幕戦(写真提供:福島民友新聞社)

震災、そして復興へ ～5年間の歩み～

1月

30日 ●総務省が公表した平成25年の人口移動報告で、本県は5,200人の転出超過。前年の13,843人の転出超過から大幅に減少し、震災前の水準に

2月

10日 ●県は、再生可能エネルギー分野の先進地ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン(NRW)州と同分野で連携する覚書を締結
22日 ●震災以降、通行止めになっていた常磐自動車道「広野-常磐富岡IC」(延長16.4km)が約3年ぶりに再開通。旧警戒区域で自動車道が通行可能になったのは初

3月

4日 ●全国知事会が、被災3県の復興を支援するため、452人の応援職員を派遣すると発表(うち福島県への派遣は151人)
9日 ●サッカーJ3リーグが開幕。本県初のJリーグチームとして参入した福島ユナイテッドFCが初戦を戦った

4月

1日 ●田村市都路地区の避難指示解除準備区域を解除
●首都圏情報発信拠点「日本橋ふくしま館 MIDETTE」がオープン
14日 ●「福島空港メガソーラー」竣工式
19日 ●産業技術総合研究所「福島再生可能エネルギー研究所」が開所
29日 ●国内最大規模のファッションイベント「東京ガールズコレクション in 福島 2014」が郡山市のビッグパレットふくしまで開催。復興支援の一環として、東北で初開催
30日 ●県が原子力災害に備えた初の広域避難計画を公表



東京都 アンテナショップ「日本橋ふくしま館 MIDETTE(ミデッテ)」がオープン



郡山市 ビッグパレットふくしまで「東京ガールズコレクション in 福島 2014」開催

©TGC in FUKUSHIMA 2014

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

5月

- 10日 ●県が平成25年度に実施した農林水産物の放射性セシウム検査で野菜・果実全てが食品衛生法の基準値を下回る。23年度の検査開始以来、初
- 14日 ●キャロライン・ケネディ駐日大使が本県を訪問。第一原発などを視察
- 21日 ●「地下水バイパス計画」で東京電力は排出基準を下回った地下水561トンを初めて海洋放出

6月

- 1日 ●JR常磐線広野-竜田駅間運転再開。避難区域内での鉄道再開は初
- 2日 ●東京電力は、汚染水対策として「凍土遮水壁」の設置工事を開始

7月

- 7日 ●会津地方の名産民芸品「起き上がり小法師」に著名人らが絵付けした作品の展示会がロンドンの英国会議事堂で開幕
- 21日 ●原発事故の影響で住民が避難した川俣町山木屋地区のトルコギキョウの収穫が始まり、4年ぶりに市場に出荷
- 25日 ●原発事故による原木シイタケ(施設栽培)の出荷制限が解除され、3年ぶりに出荷再開

8月

- 3日 ●全国高校総体のバドミントン競技で県立富岡高等学校がバドミントン団体で男女ともに優勝。大会史上初の男女同時優勝



川俣町 4年ぶりに市場に出荷するトルコギキョウを収穫 (写真提供:福島民報社)



楡葉町
JR常磐線広野-竜田駅間で運転が再開された上り列車
(写真提供:福島民友新聞社)



千葉県 全国高校総体バドミントン競技団体で、県立富岡高等学校が大会史上初の男女同時優勝 (写真提供:福島民友新聞社)



新地町
原木シイタケの出荷が3年ぶりに再開
(写真提供:福島民報社)

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

9月

- 1日 ●知事が、中間貯蔵施設の建設受入れを容認。国に対し、搬入受入れに当たっての5項目の確認事項を申入れ
- 6日 ●「ロックコープス」国内で初開催
- 15日 ●浜通りを縦断する国道6号で双葉郡内の帰還困難区域の自由通行が可能に
- 25日 ●震災後富岡町で初めて出荷用に生産、収穫されたコメの全袋検査
- 28日 ●伊達市で、東北自動車道「相馬福島道路」のうち「霊山～福島」(延長12.2km)の起工式

10月

- 1日 ●川内村の避難指示解除準備区域を解除。居住制限区域を避難指示解除準備区域に見直し
- 4日 ●bjリーグ2014-2015シーズンが開幕。福島ファイヤーボンズが郡山総合体育館で初戦を戦った
- 9日 ●震災後初の県知事選挙告示
- 18日 ●ご当地グルメによるまちおこしイベント「第9回 B-1グランプリin郡山」が開幕。45万人超が来場

11月

- 5日 ●東京電力は福島第一原発4号機使用済核燃料プールの燃料取り出し作業で、放射線量が高い使用済燃料1,331体全ての移送を完了
- 7日 ●県営初の復興公営住宅が郡山日和田町に完成し、鍵引き渡し式

12月

- 3日 ●県とデンマーク大使館が、経済交流を促進し福島県の復興と相互利益創出に貢献する覚書を交わす
- 6日 ●常磐自動車道「浪江～南相馬IC」(延長18.4km)と「相馬～山元IC」(同23.3km)が開通、相双地方-仙台市が直結
- 22日 ●東京電力が第一原発4号機の使用済核燃料プールから全ての燃料の取り出しを完了



福島市 4時間以上のボランティア活動をしてライブに参加できる「ロックコープス」開催



相馬市 海岸清掃を行ったボランティアイベント

©RockCorps supported by JT



郡山市 福島ファイヤーボンズの2014-2015シーズン開幕戦

©FUKUSHIMA FIREBONDS/bj-league



郡山市 覚書を取り交わす知事とダムスゴー駐日デンマーク大使(写真提供:福島民友新聞社)



南相馬市 常磐自動車道「浪江～南相馬IC間」と「相馬～山元IC間」が開通(写真提供:福島民友新聞社)

思いを込めて

なにかし隊とならほ応援団の連携でイベントに参加
(楡葉町で開催された「ふたばワールド」にて)



“町民みんなが笑顔でほっこりできる場をつくりたい”と
もちつき交流会を企画。



町民主体の活動である「なにかし隊」のPRをすることで
楡葉町の明るい話題を届ける。

避難している方々との
ふれあいで、見えてきたこと

震災時は東京在住で、まだ高校三年生でした。報道で津波の映像や、原発の状況を見てショックを受けました。その後も余震が度々あり、暗い気分が続きました。大学を受験するにあたって何を学びたいか考えているうちに、次第に防災に関心がわいてきました。立命館大学に入学した後は、減災プロジェクトの授業の一環として岩手に行き、ボランティア活動に参加しました。今度は自分たちで福島に行きたいという思いから「そよ風届け隊」を先輩と立ち上げ、平成25年2月には楡葉町の仮設住宅を訪れ、傾聴活動などボランティア活動に取り組みました。楡葉に通い、たくさんの方とお話しているうちに、おばあさんからお手紙を頂くなど、文通する方も増えてきたり、一緒にボランティア活動をした福島の大学生など同世代の友人もできて、楡葉との関係が深まりました。

一般社団法人ならほみらい職員
にしぎ 西崎 芽衣さん

大学在学中に学生団体「福島ボランティア便 そよ風届け隊」を設立し、楡葉町の仮設住宅にて活動。平成27年4月から1年間、一般社団法人ならほみらいの臨時職員として勤務。



主役は楡葉の人たち
そのサポートをしていきたい

その後、楡葉の皆さんと親しくなるにつれ、気持ちの変化に寄り添いたいという思いが強くなり、大学を1年間休学して、楡葉町の方が多く避難しているいわき市に移り住む決意をしました。就職活動を控え、かなり悩みましたが、今ではここに住んでよかったですと思っています。それは、住んでいるからこそ見えてくることや理解できることがあることを知ったからです。現在は一般社団法人ならほみらいの職員として、「なにかし隊」という町民グループの事務局を担当するなど、町民主体で町を良くするための取り組みのお手伝いをしています。もうすぐ大学のある京都に戻りますが、京都においても楡葉のためにできることがあると思います。これからもずっと大好きな楡葉に寄り添い、楡葉のためになる活動を続けて行きたい。私にとって楡葉は、いつでも帰って来ることができる場所です。

五年の歳月を経て、
この地に春が再びめぐりくる。
私たちは立つ。
失われたものすべてを心の中に包み込みながら。

※「東日本大震災の体験談と復興への想い」より
県内在住の男性

震災、そして復興へ ～5年間の歩み～

1月

- 7日 ●県と大熊、双葉両町は、東京電力との間に「福島第一原子力発電所の廃炉等の実施に係る周辺地域の安全確保協定」を締結
- 21日 ●原子力規制委員会は、汚染水対策として、原子炉建屋周辺の井戸「サブドレン」から地下水をくみ上げて浄化後に海に放出する計画を認可
- 27日 ●東京五輪の合宿誘致に向け、県は原発事故の対応拠点となっているJヴィレッジ(楡葉・広野町)の一部施設の営業再開を、当初予定のから9ヶ月前倒しし、平成30年7月とする方針を固める

2月

- 24日 ●除染廃棄物を保管する中間貯蔵施設をめぐる、知事が施設への廃棄物搬入の受け入れを表明
- 28日 ●イギリスのウィリアム王子が初めてご来県。本宮市で児童らとご交流

3月

- 1日 ●常磐自動車道「常磐富岡-浪江IC」(延長14.3km)が開通し、全線がつながる
- 13日 ●中間貯蔵施設の保管場へのパイロット輸送開始

4月

- 1日 ●「ふくしまステーションキャンペーン」開幕
- 「空想とアートのミュージアム福島さくら遊学舎」が三春町の廃校を再利用してオープン
- 8日 ●県立中高一貫校「ふたば未来学園高等学校」が広野町に開校
- 11日 ●久之浜防災緑地植樹祭がいわき市久之浜地区で開催。約300人が参加し、2,000本の苗木を植えた
- 12日 ●プロ野球独立リーグのBCリーグに加盟した福島ホープスが、リーグ公式戦の初戦を戦った
- 25日 ●常磐自動車道に南相馬市のサービスエリア活用拠点施設「セデッテかしま」がオープン



福島市 「ふくしまステーションキャンペーン」オープニングセレモニー(写真提供:福島民報社)



新潟市 福島ホープス、リーグ公式戦の初戦(写真提供:福島民報社)



広野町 県立中高一貫校のふたば未来学園高等学校が開校(写真提供:福島民友新聞社)



富岡町 常磐自動車道「常磐富岡-浪江IC」開通セレモニー

復興は 新たなステージへ

常磐自動車道の全線開通、ふたば未来学園高等学校の開校など、避難地域の復興の歩みはより確かなものとなってきました。
また「ふくしまステーションキャンペーン」の展開により、県内各地には多くの観光客が訪れて、復興に向けた明るい光はより一層の強まりを見せました。「誇りある福島」を築いていくため、福島への挑戦はこれからも続きます。

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

5月

- 20日 ●平成26酒造年度全国新酒鑑評会で福島県が金賞受賞数3年連続日本一
- 22日 ●本県初の国際首脳会議「第7回太平洋・島サミット」がいわき市で開催

6月

- 17日 ●秋篠宮同妃両殿下がご来県
- 22日 ●世界最大規模となる浮体式洋上風力発電の風車「ふくしま新風」が完成
- 28日 ●「ふくしまデスティネーションキャンペーン」ファイナルセレモニー

7月

- 12日～17日 ●知事欧州訪問。各国で復興の現状を説明
- 16日 ●天皇皇后両陛下ご来県
桑折町のモモ畑をご訪問。また、福島市の復興公営住宅などをご視察され、入居者のご懇談された
- 28日 ●東京電力が延期していた第一原発1号機を覆う原子炉建屋カバーの解体作業を開始



- 30日 ●「福島12市町村の将来像に関する有識者検討会」が提言を復興大臣に提出
- 県産農林水産物の魅力を発信する新CM「ふくしまプライド。篇」を発表

8月

- 26日 ●県あんぼ柿産地振興協会は、あんぼ柿の加工再開モデル地区を拡大



いわき市 浮体式洋上風力発電風車「ふくしま新風」完成(写真提供:福島民友新聞社)



福島市 「ふくしまデスティネーションキャンペーン」ファイナルセレモニー



福島市 SLふくしまDC号出発式



いわき市 「第7回太平洋・島サミット」開催(写真提供:内閣広報室)



イギリス 「ふくしま復興シンポジウム in UCL」に学生や市民が参加



スイス 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部にて福島復興状況を説明

震災、そして復興へ
～5年間の歩み～

9月

- 3日 ●国と東京電力は第一原発の汚染水対策の「サブドレン計画」で1～4号機建屋周辺の井戸から地下水をくみ上げる作業を開始
- 7日 ●県風評・風化対策強化戦略を策定
- 10-13日 ●高円宮妃殿下ご来県
- 25日 ●原発事故による避難で休業中の酪農家を支援する県酪農業協同組合が福島市土船に建設した復興牧場「フェリスラテ」が完成し、落成式

10月

- 1日 ●全町避難が続く富岡町は約4年7ヶ月ぶりに町内で一部業務を再開
- 8日 ●皇太子同妃両殿下ご来県
- 10-14日 ●ミラノ万博「ふくしまウィーク」開催
- 13日 ●知事はミラノ大学で大学幹部と懇談。本県に関する正しい情報発信に向けて協力することで合意
- 18日 ●楡葉町木戸川のサケ増殖事業が5年ぶりに復活
- 19日 ●日本原子力研究開発機構(JAEA)の楡葉町遠隔技術開発センター(モックアップ施設)が楡葉町に開所
- 26日 ●東京電力が第一原発の汚染地下水の流出を防ぐ海側遮水壁の完成を発表
- 27日 ●環境回復を担う県環境創造センター本館が三春町に開所

11月

- 3日 ●「ロボットフェスタふくしま2015」開催
- 16日 ●環境放射線の常時監視などを担う県環境放射線センターが南相馬市に開所

12月

- 25日 ●県復興計画(第3次)策定



楡葉町 日本原子力研究開発機構(JAEA)楡葉町遠隔技術開発センター(モックアップ施設)開所(写真提供:福島民報社)



郡山市 「ロボットフェスタふくしま2015」を初開催



三春町 継続的なモニタリングが行われる県環境創造センター



福島市 東北最大級の復興牧場「フェリスラテ」(写真提供:福島民報社)



イタリア ミラノ万博「ふくしまウィーク」開催



それぞれそれぞれの家族

〜 私たちから贈る、未来へのメッセージ 〜

3



「これからも一分、一秒を大切な家族のために」

「そして、ふくしまは未来へ」。

会津出身の康雄さんとウクライナ出身のリリヤさんが郡山で出会ったのは平成17年のこと。今は康雄さんの実家で5人の子どもと主人の両親の9人暮らし。

震災直後は「私は家で仕事、妻は友人のお見舞いで病院へ。子どもたちは小学校や幼稚園にいました。幼稚園は木造だったため、崩れているんじゃないかと心配で急いで迎えに行きました」と、康雄さんは当時を振り返ります。

その後、チェルノブイリ原発事故を経験したウクライナ大使館から避難を呼びかける電話が毎日のようにかかってきたそうです。「ウクライナに避難して、夫は2週間、私と子どもたちは約4カ月後に会津へ戻ってきました」と、リリヤさん。その理由を聞いてみると「ここはふるさとによく似ているし、ときどき会津訛りで話しているほど」と笑いながら教えてくれました。

そんなご夫妻は、共に地域の消防団員として防災の見廻りや火事の現場で消火活動に加わります。リリヤさんは「外国人の女性である私を団員として迎えてくれたことがとてもうれしかった」と、当時の喜びを思い出していました。

最後に震災を経験して感じたことを聞いてみると「あらためて家族と一緒にいることの大切さを感じました。これからはお互いを思いやり、一分、一秒を大事にしていこうと思います」と話してくれました。

会津若松市在住

- 荒井 康雄さん
- リリヤさん
- ユリヤさん
- 維莉哉くん
- 茉莉さん
- 聖哉くん
- 大樹くん

未来を担う若者たちのチャレンジ

震災後、前例のない課題に向き合い、創造する力を養う若者たちがいます。自ら考えようとする若者たちの気持ちはまさに復興の原動力です。福島で学んだ若者たちは、自らの可能性を広げて、未来を担う存在に成長していくことでしょう。

世界へ跳べ！ ふくしまモーグルDチーム

オリンピックに出場する選手の育成を目指して誕生した「ふくしまモーグルDチーム」。震災直後は練習もままならず、一時は存続の危機に立たされましたが、メンバー、コーチ、家族らが一丸となり、ジュニアオリンピックで優勝者を出すまでに成長しました。福島から世界に羽ばたこうとする若者たちの挑戦が続いています。



小学生から高校生までのメンバーで構成される「ふくしまモーグルDチーム」

ふたば未来学園高等学校が開校

震災前、双葉郡には5つの県立高校がありました。震災と原発事故に見舞われ、生徒らは、県内に設置されたサテライト校で授業を受ける日々が続きました。このような状況が続く中、「福島県双葉郡教育復興に関する協議会」において、平成25年7月末に、県立中高一貫校の設置を柱とする「福島県双葉郡教育復興ビジョン」が公表され、平成27年4月、復興のシンボルとなる学校を目指す県立ふたば未来学園高等学校が広野町に開校しました。



JICA(国際協力機構)二本松青年海外協力隊訓練所で行った合同特別研修



復興に向けた課題を探るフィールドワーク

高校生が伝えるふくしま食べる通信

県立安積高等学校、県立福島高等学校などの生徒らが中心となり、福島で農産物を作る生産者取材し、その生産者こだわりの食材を付録として届ける情報誌「高校生が伝えるふくしま食べる通信」を発行しています。「生産者の想いを伝えて、福島を好きになってもらいたい」という熱意が伝わってきます。



県内の農業者を取材する編集部の高年生

高校生が地元の食材を使ったお弁当とおにぎりを考案

県立小高商業高等学校の生徒が「復興につながって欲しい」、「ふるさと福島の味を思い出して欲しい」という思いから、ローソンと連携して、南相馬市でつくられた漬物、県産のお米やお肉、野菜を使用したお弁当とおにぎりの商品を開発しました。



期間限定で販売された商品の売上げの一部は東日本大震災奨学金制度に使われます。(写真提供:福島民報社)

中学生の視点で観光プランを作り日本一!



飯坂温泉観光協会をヒアリングするなど、自ら分析を行い、新しい観光プランを提案しました。

福島市立岳陽中学校イノベーション部が、地域の現状や課題を分析し、解決策を提案する「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015」高校生以下の部で最高賞を受賞しました。農業と旅行を組み合わせた、中学生が観光客を案内するという新しい旅行プランを提案し、好評を得ました。

喜多方の「蔵」を生かしたまちづくり



蔵の周囲に芝生を張り、木製デッキを併設しました。

蔵の町として知られる喜多方市で、県立喜多方桐枝高等学校の生徒と地元住民が連携して、「蔵」を生かしたまちづくりに取り組んでいます。土壁の補修や蔵の内部整理を行うことで、自分たちが住む地域の宝を知り、まちづくりの思いをかたちにしています。

さくら咲くところから未来がひらく

福島から新しい文化を発信

平成27年4月、三春町の旧桜中学校に、廃校を利活用してつくられた「空想とアートのミュージアム 福島さくら遊学舎」がオープンしました。運営するのは、福島県出身のアニメプロデューサー・浅尾芳宣さんが代表を務める福島ガイナックスです。オープンイベントには、2日間で2万人以上が訪れ、これまで、アニメの制作現場を体験できる常設展に加え、アートに関するさまざまな企画展やワークショップを展開してきました。

18歳まで福島で過ごした浅尾さんは、震災後、地方にアニメスタジオを作り、福島でコンテンツ制作することに意義があったと言います。福島ガイナックスは、地元でアニメーターを目指す人材を採用するなど地域に寄り添いながら、新しい文化を発信しています。

ドキュメンタリーアニメ「みらいへの手紙」の制作を手がける

平成28年2月、県クリエイティブディレクター 箭内道彦さん監修のもと、福島ガイナックスが制作を手がけた福島の「光と影」を伝える10本のアニメーションが発表されました。実話を基にした短編ドキュメンタリーアニメ「みらいへの手紙〜この道の途中から〜」は、震災後に起きた出来事や県民の方のさまざまな思いを10通の手紙に見立てて制作され、世代や国境を越えて共感の輪が広がってほしいという思いが込められています。

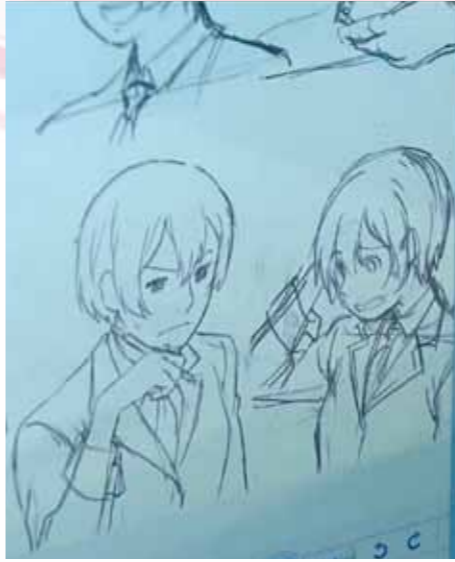


みらいへの手紙

この道の途中から



YouTube 福島県 みらいへの手紙 検索



福島発のアニメを世界に発信



株式会社福島ガイナックス 代表取締役社長 浅尾 芳宣さん



福島さくら遊学舎で行われたアニメ「みらいへの手紙〜この道の途中から〜」制作発表



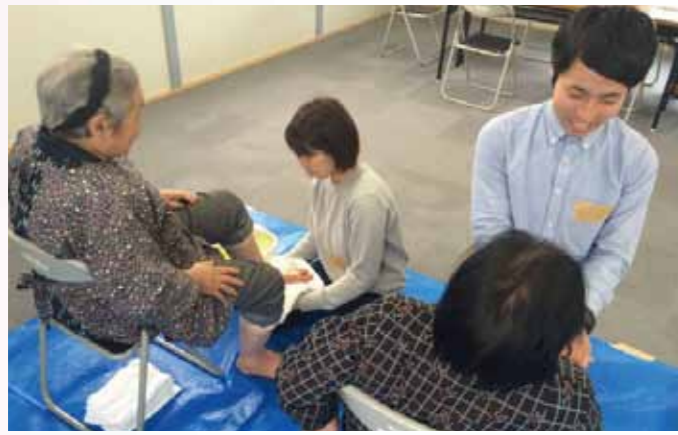
住所 / 福島県田村郡三春町大字鷹巣字瀬山213番地
交通 / 磐越自動車道 船引三春ICより約10分
開館時間 / 10:00~17:00
※受付は16:30まで

福島さくら遊学舎 検索

「みらいへの手紙〜この道の途中から〜」には、実在するモデルがいます。ここでは、モデルとなった一部の方の取り組みをご紹介します。

学生団体福島大学 災害ボランティアセンター 「いるだけ支援」

福島大学では、学生が仮設住宅に居住して生活支援や声掛けを行う「いるだけ支援」を行っています。学生が1人の生活者として仮設住宅内で活動することで、住民の方のきめ細やかなニーズに応え、人と人との交流が促進されています。



美術部員の高校生が取り組む 「がれきに花を咲かせようプロジェクト」

震災後、県立保原高等学校の美術部では、がれきに絵を描く活動や原発作業員への激励活動、仮設住宅の訪問や壁画などの住民との交流、地域への貢献活動など、さまざまなアート表現で被災地に元気を発信しています。

地域のお母さんがつくる家庭の味 「おだかのひるごはん」

除染作業員や一時的に戻ってくる住民に、あたたかい食事を提供したいとの思いから、南相馬市小高区にお昼の3時間だけ営業する食堂「おだかのひるごはん」がありました。現在は閉店し、店舗を貸していた「双葉食堂」が営業を再開する予定です。



福島県復興計画(第3次)

～未来につなげる、うつくしま～

復興の状況を踏まえ復興計画を改定

東日本大震災、原発事故の発生から5年目を迎え、本県の復興をめぐる状況変化に対応し、必要な取り組みを進めていくため、県民の皆さんや市町村のご意見などを踏まえながら復興計画の見直しを行い、平成27年12月25日、復興計画(第3次)を策定しました。

「新生ふくしま」の創造へ復興に向けた重点プロジェクトを推進

本県の復興・復興のために特に重要な取り組みを10の「重点プロジェクト」として位置付け、県民、市町村、NPO団体、民間団体の皆さんとともに進めていきます。

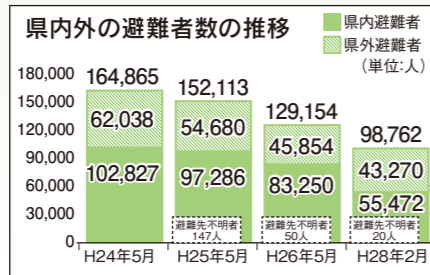
安心して住み、暮らす

2 生活再建支援プロジェクト

避難者・被災者の安全・安心な暮らしの実現に向け、保健・医療・教育・雇用などの避難者支援とともに、復興公営住宅の整備や恒久住宅への移行支援などによる住まいの確保や帰還支援に取り組みます。

復興の現状と課題

避難者数は徐々に減少傾向にあります。いまだ多くの方が県内外で避難生活を続けています。



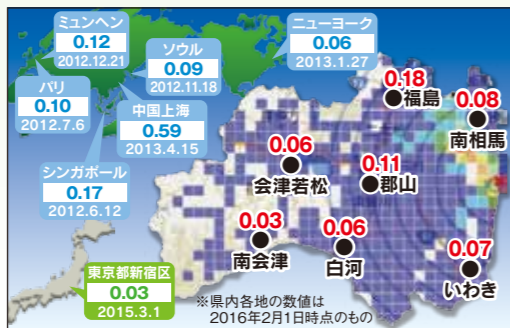
安心して住み、暮らす

3 環境回復プロジェクト

避難者の帰還や安心して暮らせる環境の確保に向け、着実な除染の実施や除去土壌などの適正な保管・管理、食品の安全確保、空間線量や放射性物質などの研究、廃炉に向けた安全監視を進めます。

復興の現状と課題

空間放射線量は大幅に減少していますが、安心して生活ができる環境の確保に向け、引き続き着実な除染の実施が必要です。



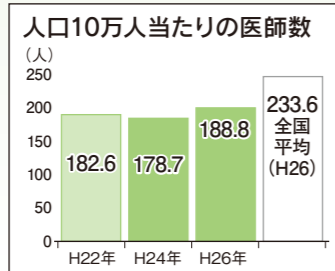
安心して住み、暮らす

4 心身の健康を守るプロジェクト

県民の心身の健康の保持・増進に向け、県民健康調査による県民健康の見守りや地域医療・福祉を担う人材の養成・確保、最先端医療の提供、被災者などの心のケアを推進します。

復興の現状と課題

震災・原発事故を契機として医療従事者の不足が顕著となっており、環境整備を進めるとともに、人材の育成・確保に取り組みます。



避難地域等の復興・再生

I 避難地域等復興加速化プロジェクト

避難指示の解除を見据えた環境整備に向けて、避難地域、浜通り地域における復興拠点の整備や事業・営農の再開支援など、産業・生業の再生、医療・福祉の確保などの取り組みを進めます。

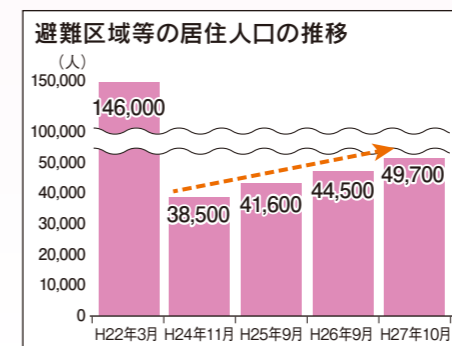
また、原発事故によって失われた産業・雇用の場を創出し、帰還や移住の促進を図るため、ロボットの研究などを通じてイノベーション・コースト構想の具体化を核とした新たな技術の導入や産業の創出、未来を担う人材の育成強化などを推進します。



復興の現状と課題

避難指示の解除が進む中、居住人口は緩やかな回復傾向にあり、避難地域等のさらなる復興に向け、環境の整備が必要です。

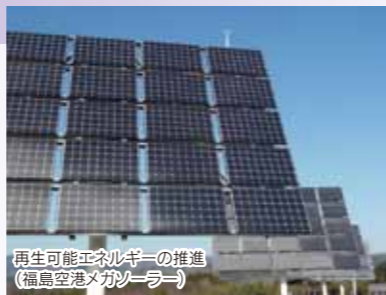
※居住人口:避難指示などが解除された区域において生活の本拠を有する人口



ふるさとで働く

8 新産業創造 プロジェクト

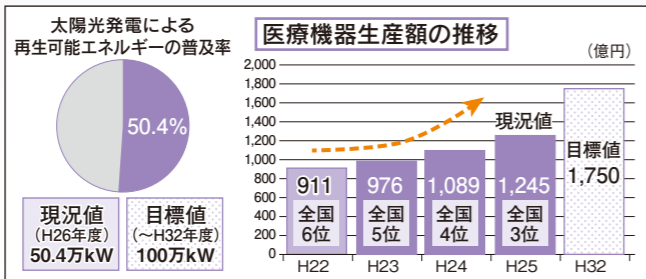
震災・原発事故により失われた産業の復興に向け、再生可能エネルギー産業、医療関連産業、ロボット関連産業の集積により持続性のある産業基盤の構築を進めます。



再生可能エネルギーの推進 (福島空港メガソーラー)
ロボット関連産業の集積 (災害対応ロボット:株式会社菊池製作所)

復興の現状と課題

再生可能エネルギー関連産業や医療関連産業分野の工場立地が伸び悩んでおり、産業集積に向けた取り組みが必要です。



まちをつくり、人とつながる

9 風評・風化対策 プロジェクト

風評払拭と風化防止に向け、国内外への本県の正確な情報の発信とともに、県産品の販路回復・開拓や観光誘客の促進、教育旅行の回復、東京オリンピック・パラリンピックを契機とした交流促進の取り組みを進めます。



教育旅行の回復 (五色沼) (※イメージ)



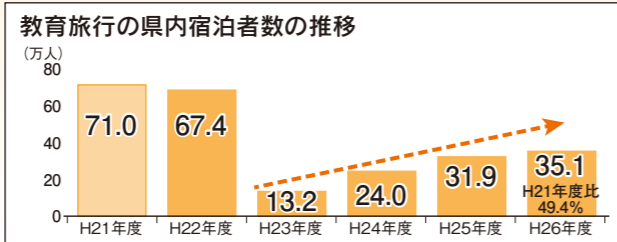
知事トップセールス



海外の学生を本県に招へい

復興の現状と課題

風評等により、教育旅行 (修学旅行、合宿) など本県への観光客は大きく落ち込み、依然として厳しい状況にあります。



まちをつくり、人とつながる

10 復興まちづくり・交流ネットワーク基盤強化 プロジェクト

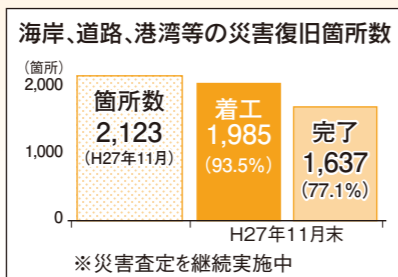
海岸堤防や防災緑地、防災林、道路などの複合的な整備・復旧により津波被災地の“多重防御”を推進します。

また、広域道路ネットワークの強化や小名浜港、相馬港の物流拠点化、JR常磐線・只見線の復旧を進めます。



復興の現状と課題

被災した公共土木施設などは、会津・中通りでは復旧がほぼ完了していますが、避難区域内の復旧は、国が行う除染などと調整を図りながら進めていく必要があります。



安心して住み、暮らす

5 子ども・若者育成 プロジェクト

安心して子育てできる環境の整備に向け、妊婦や保護者の相談体制の充実や18歳以下の医療費無料化、運動・食育等の健康教育、確かな学力の育成などの取り組みを進めます。



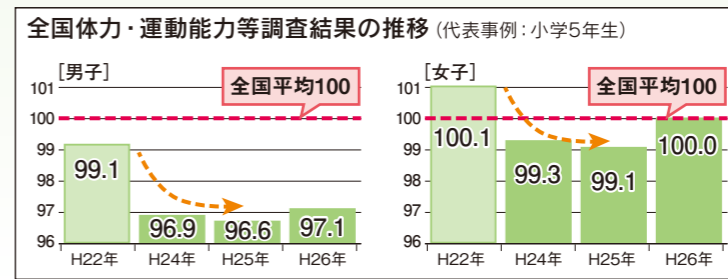
安心して遊び、運動できる環境の整備



運動・食育等の健康教育

復興の現状と課題

震災後の屋外活動の減少に伴い、小学生を中心に運動能力が低下し、改善に向けた取り組みが必要です。



18歳以下の医療費の無料化 (※イメージ)

ふるさとで働く

6 農林水産業再生 プロジェクト

県産農林水産物の安全・安心の確保を図るため、モニタリング検査や情報発信などを進めるとともに、地域産業6次化や担い手の育成・確保などの取り組みを通じて、農業、森林林業、水産業の再生を進めます。



米の全量全袋検査



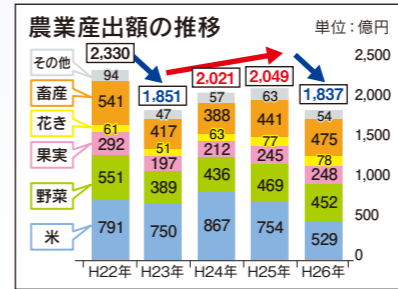
放射性物質の拡散抑制対策と併せた森林整備



沿岸漁業の試験操業

復興の現状と課題

原発事故に伴う風評はいまだ根強いことから、安全・安心の確保や農林水産物の魅力のPRなどの取り組みが必要です。



ふるさとで働く

7 中小企業等復興 プロジェクト

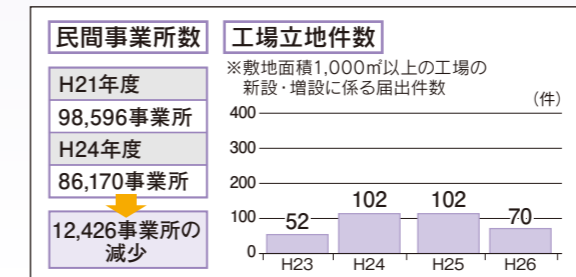
被災や風評による影響を克服し、地域産業の復興に向け、県産品のブランド化や海外取引支援などによる販路開拓・取引拡大、産業を担う人材の育成、人材確保・就業支援などを進めます。



産業人材の育成 (テクノアカデミー浜)

復興の現状と課題

震災・原発事故により、県内企業が大きく減少しており、産業復興に向けた企業誘致などが必要です。





福島市花見山公園から市内を望む

